

河川

運河

広場、公園、森

広場

公園、庭園

森

四大墓地

観光

主な観光名所

文化

経済

主だった企業

社会情勢

人口

世帯構成

経済格差

移民

教育

初等・中等教育

高等教育

歴史

現在の状況

医療・衛生

交通

空港

鉄道

道路

おもな一般道

主な車輻専用道

スポーツ施設

日本人とパリ

パリ症候群

姉妹都市・提携都市

世界にあるパリ

脚注

関連項目

外部リンク

概要

市域はティエールの城壁跡に造られた環状高速道路の内側の市街地（面積は86.99km²。参考：東京都・山手線の内側は63km²、ニューヨーク市・マンハッタンは59km²）、および、その外側西部のブローニュの森と外側東部のヴァンセンヌの森を併せた形となっており、面積は105.40km²。ケスタ地形を呈するパリ盆地のほぼ中央に位置し、市内をセーヌ川が貫く。この川の中州であるシテ島を中心に発達した。市内の地形は比較的平坦であるが、標高は最低でセーヌ川沿いの35メートル、最高でモンマルトルの丘の130メートルである^[3]。北緯49度とやや高緯度に位置するが、温かい北大西洋海流と偏西風によって1年を通して比較的温暖となっており、西岸海洋性気候の代表的な都市である。



公式サイト www.paris.fr (<https://www.paris.fr>)



ランドサット衛星写真



パリの行政区

世界有数の大都市であり、アメリカのシンクタンクが2017年に発表した総合的な世界都市ランキングにおいて、ロンドン、ニューヨークに次ぐ世界3位の都市と評価された^[4]。日本の民間シンクタンクによる2017年発表の「世界の都市総合力ランキング」(森記念財団都市戦略研究所、森ビル)では、ロンドン、ニューヨーク、東京に次ぐ世界4位の都市と評価された^[5]。フランス経済の中心地で、世界屈指の経済都市であり、多国籍企業の本社数や資本市場の規模などビジネス分野を総合評価した都市ランキングでは、ロンドンとともにヨーロッパでトップクラスであり、世界500大企業の本社数では、ニューヨークやロンドンを凌ぎ、西洋の都市では最多である。2014年のアメリカのダウ・ジョーンズらの調査によると、世界7位の金融センターと評価されており、欧州ではロンドンに次ぐ2位である^[6]。

パリは年間外国人観光客数が世界一の観光都市である。歴史的な建物を観ることができ、ルーヴル美術館、ポンピドゥーセンターなどをはじめとした一流の美術館で膨大な数の一流の美術品を観賞できる。また世界最古のバレエ団や、世界でもっとも古くから存在している劇団などの公演を楽しむこともできる。

パリ出身者・居住者は男性がパリジャン(仏: *Parisien*、フランス語発音: [paʁizjɑ̃] パリズィヤン)、女性がパリジェンヌ(仏: *Parisienne*、フランス語発音: [paʁizjɛn] パリズィエンヌ)と呼ばれる。1960年代以降、旧植民地であったアフリカ中部・北部やインドシナ半島、さらに近年は中近東や東欧、中国などからの移民も増え、パリジャン・パリジェンヌも多民族・多人種化している。

市域人口は1950年代の約290万人を絶頂に減少し続けたが、ここ数年は微増傾向に転じており、2011年現在で約225万人である(INSEEによる)。2011年の近郊を含む都市的地域の人口では1,200万人を超えており、ロンドンを凌ぐEU最大の都市部を形成している^[7]。

標語

パリ市の標語は「たゆたえども沈まず(ラテン語: *Fluctuat nec mergitur*, フランス語: *il est battu par les flots mais ne sombre pas*)^[8]」であり、これはパリの紋章の下部に書かれている。もともと水運の中心地だったパリで、水上商人組合の船乗りの言葉だったが、やがて戦乱、革命など歴史の荒波を生き抜いてきたパリ市民の象徴となっていくた。この標語は特に2015年のパリ同時多発テロ事件の直後、パリの街角に多数掲げられた^{[8][9]}。

風景



エッフェル塔からのパリの360度のパノラマ



トゥール・モンパルナスからのパリのパノラマ

歴史

詳細は「[パリの歴史](#)」を参照

「[フランスの歴史](#)」も参照

語源

語源はParisii(パリシイ、パリースィイとも。複数形。単数形はParisius「田舎者、乱暴者」)で、ローマ人が入ってくる以前からの先住民であるケルト系部族の、ローマ側からの呼称である。欧州の言語の中で古い時代の痕跡をとどめているギリシャ語ではπαρίσι(パリーズィ)、イタリア語で Parigi(パリージ)と発音される。フィンランド語で Pariisi(パリースィイ)と発音されるのはこれに由来しているという説がある。ルーテティア(・パリースィオールム)――Lutetia(Parisi^{orum})、「パリシイ族の、水の中の居住地」(シテ島のこと)とも呼ばれていた。



国立中世美術館に残るクリュニー浴場のカルダリウム

古代

パリ盆地を流れるセーヌ川の中洲シテ島は古くから同川の渡河点であり、紀元前3世紀ごろからパリシイ族の集落ルテティアがあった。紀元前1世紀、ガリア戦争の結果ルテティアはローマ支配下に入った。ローマ時代のルテティアはシテ島からセーヌ左岸にかけて広がっており、円形劇場(闘技場)や公衆浴場などが築かれた。現在でも5区に円形劇場・闘技場の遺跡(アレーヌ・ド・リュテス)や浴場跡が残っている。しかし、ローマが衰退すると左岸の市街地は放棄され、シテ島のみを範囲とする城塞都市になった。このころからルテティアに代わり「パリ」と呼ばれるようになった。



9世紀のシテ島の地図

フランク王国

5世紀末にフランク族の王クロヴィス1世はパリを征服し、508年にはパリをメロヴィング朝フランク王国の首都とした。しかしクロヴィス1世の死後王国はいくつかに分裂したため、パリは現在のフランスよりも狭い範囲の都でしかなかった。シャルルマーニュ(カール大帝)以降のカロリング朝フランク王国の中心はライン川流域にあり、パリは一地方都市でしかなかった。

885年から886年にかけてパリはヴァイキングの襲撃を受けた。このとき、フランク王シャルル3世(カール3世)は金銭を支払って講和を結んだため信望を失い、代わってパリ伯の権威が上昇することになった。このころからセーヌ右岸側にも市街地が拡大した。

カペー朝

西フランク王国が断絶すると、987年にパリ伯ユーグ・カペーがフランス王に推挙されたことから、パリはフランス王国の首都となった。王権の強化にしたがって首都も発達し、王宮としてシテ宮が建築された。フィリップ2世の時代にはパリを囲む城壁(フィリップ・オーギュストの城壁)も築かれ、その西に要塞(のちにルーヴル宮殿に発展する)が設けられた。このころのパリは初期スコラ学の中心のひとつでもあり、11世紀ごろからパリ大司教座聖堂付の学校が発達し、1200年には王にも承認され、のちのパリ大学につながっていった。パリ大学は特に神学の研究で著名であった。右岸に中央市場「レ・アル(Le^s Halles)」が作られたもこのころである。こうして、左岸は大学の街、右岸は商人の街という現在まで続く町の原型が定まった。

12世紀にはパリ水運商人組合が結成され、のちにパリ商人頭は事実上の市長として市政を司るようになる。

13世紀になると、ルイ9世によってサント・シャペルが建築されたほか、ノートルダム大聖堂も一応の完成を見る。パリは成長を続け、セーヌ左岸も再び人口を増やしていた。王たちは次第にヴァンセンヌ城を居城とするようになったが、行政機構はシテ宮に残った。



1223年のパリ



ヴァンセンヌ城

14世紀初頭のパリの人口は約20万人と推定され、ヨーロッパ随一の都市であった。

ヴァロワ朝

1328年にカペー朝が断絶したことなどを契機とする百年戦争の最中、パリ商人頭となったエティエンヌ・マルセルは王に匹敵する権力を持ち、王と対立した。シャルル5世は、1356年から1383年にかけて新たな城壁(シャルル5世の城壁)を築いて市域を拡大させ、1370年にサン＝ダントワヌ要塞(のちのバステューヌ牢獄)を築いた。また、ルーヴル宮殿を王宮とした。



「ベリー公のいとも豪華なる時祷書」に描かれた15世紀のルーヴル宮殿

15世紀初めにおいても、パリの支配権と王および王族の確保をめぐる、オルレアン派(のちにアルマニャック伯を頼って同盟した後アルマニャック派)とブルゴーニュ派との対立である百年戦争が、イングランドをも巻き込んで続いていた。ジャンヌ・ダルクの活躍などもあり、1435年のアラスの和約でブルゴーニュ派と和解して勢力を伸ばしたシャルル7世率いるフランス軍は1436年にパリを奪還し、翌1437年に改めてパリが首都と定められた。その後、1453年にフランスにおけるイングランド領の大半が陥落したことにより、百年戦争は終結した。百年戦争後のパリの人口は10万人程度にまで減少していた。

この後もフランス王はパリには住まず、ブロワ城やアンボワーズ城などのロワール溪谷の城を好んだ。特にフランソワ1世は、ロワールにシャンボール城を築いたほか、パリ近郊にフォンテーヌブロー宮殿を発展させた。もっともフランソワ1世は、公式的には1528年にパリを居城と定めた。パリでは学術が発展し、コレージュ・ド・フランスにおいて、大学教育課程(理論とリベラルアーツ)が近代教育課程に加えられ、王が望んだ人文主義や正確な科学が研究されるようになった。

16世紀後半、ユグノー戦争の時代にはパリはカトリック派の拠点であり、1572年にはサン・バルテルミの虐殺が起こってプロテスタントが殺害されるなどした。シャルル9世を継いだアンリ3世は平和的な解決を模索したが、民衆は反乱し、バリケードの日と呼ばれる1588年5月12日にアンリ3世を強制追放した。このときからパリは、16区総代会(Seize)という組織によって統治されるようになった。

その後、カトリック派からの反発を招いたアンリ3世が暗殺され、ヴァロワ朝は断絶した。

ブルボン朝

1594年、アンリ4世の即位によりパリは名実ともにフランスの首都の座を回復した。ヴァロワ朝後期の王と異なり、アンリ4世はパリをおもな居住場所とし、都市での多くの公共事業を行った。ルーブル宮殿の拡張、ポンヌフ、ヴォージュ広場、ドフィーヌ広場、サン・ルイ病院の建設がなされた。フォンテーヌブロー宮殿もよく用いられ、次のレイ13世はこの宮殿で生まれている。ほかにもサン＝ジェルマン＝アン＝レーにも居城があった。

ルイ13世の治世下にはパリは大きく変化した。その母のマリー・ド・メディシスによるテュイルリー宮殿やリュクサンブール宮殿、リシュリユーによるパレ・ロワイヤルが建設され、ソルボンヌ大学の改築も行われた。

太陽王ルイ14世の即位後まもなくフロンドの乱が起り、反動的に貴族勢力が打倒された結果、絶対王政の確立が促された。ルイ14世は、1677年に居城をヴェルサイユに移した。財務総監のジャン＝バティスト・コルベールはパリでの豪華な建設事業を行い、太陽王にふさわしい「新たなローマ」を作り上げようとした。廃兵院などはこのころの建築である。しかし王自身はパリを好まず、パリ郊外の広大なヴェルサイユ宮殿にて執政を行うことを好んだ。このときまでにパリは中世の市域を大きく越えて成長し、17世紀半ばには人口約50万人、建物約2万5,000棟に達していた。以降、政治の中心地は、ルイ16世の治世末期までヴェルサイユに移ることとなる。

ルイ15世は1715年に居城をいったんパリに戻したが、1722年にはヴェルサイユに居城を再度移してしまう。1752年にはエコール・ミリテールが創設され、1754年にはサント・ジュヌヴィエーヴの丘に教会（現在のパンテオン）が建設された。

ルイ16世（フランス王）治世下の1784年から1790年にかけて、新たな城壁であるフェルミエール・ジェネローの城壁が建設される。

18世紀は、やはり経済的成長の世紀で、人口が増大した。フランス革命直前のパリの人口は64万人を数えた。啓蒙主義、啓蒙思想が発展し、ヴォルテール、ジャン＝ジャック・ルソー、『百科全書』のドゥニ・ディドロ、シャルル・ド・モンテスキューらが活躍した。宮廷がヴェルサイユに置かれたのに対抗し、王族のオルレアン公がパレ・ロワイヤルを増築改修すると、この地はパリ随一の繁華街を形成し、啓蒙思想家のみならずあらゆる階層の人々を引きつけ、とりわけ急進的な革命家の根拠地ともなった。

フランス革命

詳細は「フランス革命」を参照

1789年7月14日、パリ市内で発生したバステューユ襲撃によってフランス革命が勃発した。ヴェルサイユ行進でルイ16世が強制的にパリのテュイルリー宮殿に戻されてからは、革命の重要な事件の多くがパリで発生した。

1790年にパリ県が成立し、1795年にセーヌ県へと改称される。パリ市は県庁所在地とされていた。

19世紀

混乱を経た1800年当時の人口は、54万7,756人であった。ナポレオン1世は、パリを新しいローマとすべく、帝都と定め、カール・ゼーデルの凱旋門やエトワール凱旋門を建て、ウルグ運河(en)を開削するなどした。

第一帝政後の19世紀のパリは、復古王政期および1848年革命（二月革命）を経て、第二共和政、第二帝政さらに第三共和政へと、王政ないし帝政と共和政が交錯し、政治的には安定しなかったものの、産業革命の到来により経済的・文化的には繁栄した。

文化面では、ヴィクトル・ユーゴー、オノレ・ド・バルザック、エミール・ゾラ、スタンダールといった文豪に加え、19世紀後半にはエドゥアール・マネやモネ、ドガ、ルノワール、セザンヌ、ピサロ、モリゾ、ギョマン、シスレーといった印象派の画家が活躍し始めた。スーラ、ゴッホ、ポール・ゴーギャンなどのポスト印象派、新印象派へと続くものとなった。

1837年にはパリ・サン＝ジェルマン鉄道のサン・ラザール駅、1840年にヴェルサイユ・左岸鉄道のモンパルナス駅、1840年にパリ・オルレアン鉄道のオステルリッツ駅、1846年に北部鉄道（フランス）のパリ北駅、1846年にソー鉄道のアンフェール城門駅（ダンフェール＝ロシュロー駅）、1849年にパリ・リヨン鉄道のリヨン駅およびパリ・ストラスブール鉄道のストラスブール駅（パリ東駅）がそれぞれ建設された。他方、1841年から1844年にかけてティエールの城壁が築かれ、こららの放射状路線をつなぎ、城壁内の補給路を確保するために、プチ・サンチュールが1852年から建設され始めた。

第二帝政下ではセーヌ県知事ジョルジュ・オスマンによってパリ改造が行われた。中世以来の狭い路地を壊して道路網を一新したほか、上下水道の設置など都心部の再開発や社会基盤の整備が行われた。水道の水はジェネラル・デゾーが供給するようになった。これらによりパリは近代都市として生まれ変わった。現在のパリ市中心部の姿はほぼこのときの状態をとどめている。1860年、ティエールの城壁内のコミューンがパリに併合された。併合後である1861年当時の人口は169万6,141人だった。

普仏戦争でナポレオン3世の主力軍が敗北すると、パリは1870年9月からプロイセン軍に包囲された。翌1871年1月に第三共和政の政府は降伏したが、パリの労働者らはこれを認めず蜂起した。3月には史上初の労働者階級の政権パリ・コミューンが発足したが、ヴェルサイユ政府軍の攻撃によりわずか2か月で崩壊した。コミューンの最後はパリ市内での市街戦となり、大きな被害を出した。

クレディ・リヨネのパリ支店支配人Mazeratがリヨン本店支配人Letourneurに書き送ったところによると、普仏戦争以後に企てられた全事業でロスチャイルドとその庇護下のオートバンクが独占的役割を果たした。パリ市はロスチャイルドらより2億フランを借り受け、ドイツへ占領税を支払った。20億フランのパリ市公債もロスチャイルドらが引き受けた^[10]。

19世紀末から20世紀初めにかけて、パリでは数回の万国博覧会が開かれた。1889年の万博ではエッフェル塔が建てられ、1900年にはメトロが開業した。この時代をベル・エポック（よき時代）と呼ぶ。パリは「光の都」と呼ばれ、ロンドンに匹敵する経済都市に成長した。



メーリアンによる1615年パリ地図



1735年のパリの地図



バステューユ襲撃



第二帝政および第三共和政下の都市改造



クロード・モネ『サン・ラザール駅』1877年

20世紀

20世紀にはさらに工業が進展し、このころまだまとまった敷地が残っていたパリ郊外にルノーやシトロエンの工場ができた。パリで働くための移民が集まり、赤いバンリューの起源となった。1904年6月、1,000万フランのロスチャイルド財団が一族6人^[11]と北部鉄道（フランス）の役員3人を発起人として設立された。この財団は建築家を直接雇用して財団所有の事務所に集め、低廉住宅の建築様式を共同作成させた。優秀作の意匠権は賞金と引き換えに財団が所有した。^[12]1912年12月23日のボンヌヴェ法は全会一致で可決され、パリ市が低廉住宅を建設するために要請していた2億フランの借款を認めた^[13]。

第一次世界大戦の緒戦ではドイツ軍がパリの目前にまで迫り、政府が一時ボルドーに避難するほどであったが、マルヌ会戦の勝利により辛くも陥落を免れた。大戦後半にはパリ砲による砲撃を受けた。戦間期にはパリは芸術の都としての地位を回復し、アメリカやヨーロッパなどから多くのボヘミアンたちを惹きつけた。

しかし第二次世界大戦が勃発すると、ナチス・ドイツのフランス侵攻開始から1か月で政府はパリを放棄せざるを得なくなり、1940年6月14日にはドイツ軍がパリをほぼ無血で占領した。6月23日にはアドルフ・ヒトラーがパリに入った。占領下のパリではレジスタンス運動に身を投じる者がいる一方で、積極的にドイツ軍に協力する市民もいた。後者はのちに対独協力者として糾弾されることになる。

ノルマンディー上陸作戦から2か月半後の1944年8月25日、パリは連合国軍と自由フランス軍によって解放された。このときドイツ軍のパリ駐留部隊を指揮していたディートリヒ・フォン・コルティッツ將軍は、ヒトラーからパリを破壊するよう命令されていたが、これを拒んで部隊を無抵抗で退却させ、自身は降伏した。この英断によりフォン・コルティッツは戦後、フランスから名誉パリ市民号を贈られている。

20世紀のパリは文化的にも成熟し、アルベール・カミュやジャン＝ポール・サルトルらが実存主義を生み出し、マルセル・ブルーストやアンドレ・ジッドなどの小説家が輩出された。1960年に創刊された前衛雑誌『テル・ケル』にはロラン・バルト、ジョルジュ・バタイユ、ミシェル・フーコー、ジャック・デリダ、ジュリア・クリステヴァらが名を連ね、構造主義とポスト構造主義は世界的な影響力を持ち、フランス現代思想が隆盛を極めた。映画界では、1950年代末から1960年代中盤にかけて、ジャン＝リュック・ゴダールやフランソワ・トリュフォーらヌーヴェルヴァーグが台頭した。

人民戦線の頃以降のフランス共産党の党勢拡大などを背景として、1968年1月1日、セーヌ県が廃止され、パリは特別市となった。このような政治的や文化的状況下で、五月革命が起こった。

戦後のパリでは、おもに郊外（バンリュー）で人口が急増した。環状高速道路ペリフェリックをはじめとする高速道路網や、郊外と都心を直結する鉄道RERなどが整備され、ラ・デファンス地区がオフィス街として開発された。一方で豊かな都心と貧しい郊外という構図が生まれ、失業や治安の悪化が社会問題となった。2005年にはパリ郊外暴動事件が発生した。

2015年11月にはパリ同時多発テロ事件が発生した。

政治・行政・司法

行政機構の変遷

フランス革命後の地方自治制度では、パリ市はセーヌ県（当初の名称はパリ県）に属する一コミューンであり、同県の県庁所在地であった。当時の市域は現在より狭く、フェルミエール・ジェネローの城壁（現在は、ほぼその跡に沿ってメトロ2号線・6号線が走っている）の内側のみであった。当初は、48の地区に細分化されていたが、各地区を統合する形で12の行政区が設けられるに至った。

1860年に市域が拡張されてほぼ現在の範囲となり、同時に新たな20の行政区が設けられた。これらの行政区は、1795年10月11日以降存在していた12の旧行政区から置き換えられたものである。

1968年1月1日に完全施行された「パリ地域の再編に関する1964年7月10日法」による再編以降、セーヌ県が廃止され、パリ市は単独で県と同格のコミューン、いわゆる特別市となった。県でもあるパリは、県を構成する唯一のコミューン以外に下位機構を有しない1県1市となった。この唯一のコミューンは、1860年のパリ拡張の際に創設された20の行政区と18の選挙区に分けられている。

1976年にイル＝ド＝フランス地域圏が発足すると、パリはその首府となった。

行政区

市内20の区（arrondissement）は、パリ市街地の1区から、右回りの渦巻状に番号がつけられている。1 - 4、8 - 12、16 - 20区は右岸に、5 - 7、13 - 15区は左岸に位置する。

行政的地位の変遷



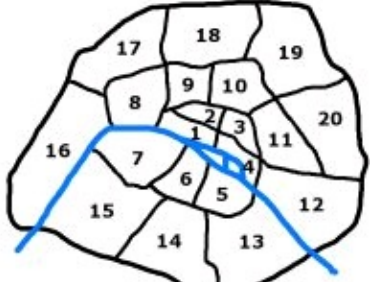
パリ万国博覧会（1889年）



パリに入城したドイツ国防軍



パリの解放



左：1795年から1860年までの12の行政区と48のカルティエ／右：1860年以降の20の行政区

この街の行政的地位は何度も変更されている。1871年3月26日から5月22日まで、パリには、蜂起勢力である代表制普通選挙による議会をともなうパリ・コミューンによる政府が置かれた。1870年に成立した第三共和政は、この出来事への恐怖心を持つ保守主義者たちによって運営されていた。彼らは、パリの行政権をセーヌ県知事(préfet de la Seine)に、パリの警察権を警視総監(préfet de police)にそれぞれ与えることを内容とする1884年4月5日法を制定した。他方、市町村選挙で議員が選出されるパリの議会は、毎年、主として代表者としての機能を有する「議長」を選出していた。すなわち、パリには市長がいなかった。また街の予算は、国の同意を得る必要があった。

1975年12月31日法（1977年の市町村選挙の際に施行された）は、109人の議員で構成される市議会かつ県議会であるパリの議会を創設し、議員によってパリ市長を選出することにした。区の委員会 は、諮問と推進の役割を有していた。委員会の構成員は、選挙人・パリ市長・パリの議会によって選出された。警視総監は国家により任命され、警察権を行使する。



夜のパリ市庁舎

パリ・リヨン・マルセイユおよびコミューン間の協力による公共機関に関する1982年12月31日法が、パリには1983年の市町村選挙の際に施行され、163人の議員を選出することになったほか、特に予算に関する議会の権限が拡大し、委員会を廃して区議会が創設された。

2002年5月2日の2002-810号デクレ以降、行政警察権がパリ市長と警視総監に共有されることとなり、その実現のために、両者は互いの活動方法を相互に承認することとなった。承認手続に関しては、パリ議会が審議したうえ、毎年その予算および決算を承認する必要がある^[14]（この予算は国家によって決められたものである）。パリ市長はこれ以降、生活安全分野に関する限り、たとえ警視総監の手中にある権限に関するものであっても関与することになった。

パリの議会の活動は、パリ市が資本を保有する会社の仲介人やパリの混合経済会社（SEM）によっても実現される。

ほかのコミューンとの連携の不存在

ほかの主要都市とは異なり、パリとその郊外のコミューンとの間、« 大パリ » 内には、固有の予算をともなうコミューン間の連携が存在しない。もともと、パリとその郊外の県との間では、下水道組合（SIAAP, Syndicat interdépartemental pour l’assainissement de l’agglomération parisienne）の再編を行った。また、イル＝ド＝フランス交通組合（STIF）は、イル＝ド＝フランス地域圏の公共機関であり、パリとその郊外の総合的な交通網整備を行う組織である。

ほかの国際的な大都市と異なり、おおよそ環状のペリフェリックで区切られる中心市街のみを範囲とするパリの街については、その実際的な範囲を明確にする必要がある。上述各城壁の変遷で見ように歴史的かつ政治的な配慮が障害となつて、« 大パリ » を管理する行政機関が存在しないことは、パリ都市圏の現在の主要な問題のひとつである^[15]。

現在のパリ市の領域は、上述概要の項で指摘されているように東京の山手線内よりやや広い程度である。その市域の境界線は歴史的で時代錯誤な経緯の産物、あるいは現在はパリ都市圏に取り込まれ、消えてしまった地形に適合していたにすぎないものであるにもかかわらず、市域の内外を問わず、パリ都市圏の人々には共通の行政的需要ならびに経済的・社会的関心がある。ところが、各コミューンは行政的・税制的に独立しており、コミューンや県の枠を超えて存在する集団的需要（交通や住宅など）に関する組織については、都市圏規模のまとめ役となる機構が存在しない。イル＝ド＝フランス地域圏となると、地域の約80パーセントに農村部が残っており、パリ都市圏のための枠としては大き過ぎ、« 大パリ » たるパリ都市圏内の適切な連携に適っていない現状がある。

歴代市長

詳細は「fr:Liste des maires de Paris」および「fr:Préfet de Paris」を参照

初代市長はジャン＝シルヴァン・バイイ（在任：1789年7月15日 - 1791年11月18日）。

1795年 - 1848年の2月革命まで、12の区に分割され各区にConseil municipal（議会）が置かれ自治が行われたため、パリ市長は置かれなくなった。1795年 - 1977年の間、わずかな例外（2月革命後の4人の市長）を除いて市長は置かれず、各区のConseil municipalの議長が実質上は市長のような務めを果たした^[16]。1977年以降はパリ県知事（Préfet）と併存だが、市長が市と県を兼ねた議会の議長として県の長とされる。

歴代市長					
-	氏名	就任	離任	政党	補記(他の資格 等)
-	ジャック・シラク	1977年3月20日	1995年5月16日	共和国連合	国民議会議員
-	ジャン・チベリ	1995年5月22日	2001年3月24日	共和国連合	国民議会議員
-	ベルトラン・ドラノエ	2001年3月25日	2014年4月5日	社会党	元元老院議員
-	アンヌ・イダルゴ	2014年4月5日	現職	社会党	初の女性パリ市長

予算と税収

2011年の当初予算(街および県としてのもの)は約85億8,200万ユーロで、うち69億600万ユーロが行政活動に、16億7,600万ユーロが投資に充てられている^[17]。債務残高は約26億9,600万ユーロである。2008年の県債は266億ユーロにのぼる^[18]。

裁判機関

司法裁判所系統

パリ大審裁判所がシテ島のパレ・ド・ジュスティス（パリ）に置かれている。この裁判所は、フランスの大部分の訴訟事件を取り扱う巨大司法機関である^[19]。各区には小審裁判所が置かれている。

パリ商事裁判所は、やはりシテ島(コルス河岸)に置かれている。パリ違警罪裁判所は19区(rue de Cambrai)、パリ労働審判所は10区(rue Louis-Blanc)にそれぞれ置かれている。

パリのみを管轄する裁判所以外に、複数の県を管轄するパリ控訴院もパレ・ド・ジュスティスに置かれている。その管轄は、セーヌ＝エ＝マルヌ県、エソンヌ県、セーヌ＝サン＝ドニ県、ヴァル＝ド＝マルヌ県、ヨンヌ県である。パリ控訴院の管轄区域には、フランス全人口の12.6パーセントが暮らしている^[20]。なお、ほかのイル＝ド＝フランス地域圏内の各県およびウール＝エ＝ロワール県は、ヴェルサイユ控訴院の管轄となる^[21]。

行政裁判所系統

パリは、4区所在のパリ地方行政裁判所の管轄に属する。控訴は、パリ行政控訴院に対して行うことになる(ほかに、マタ・ウトウ、ムラン、ヌーヴェル・カレドニー、フランス領ポリネシアの各地方行政裁判所からの控訴を受ける)。

最高裁判所及び憲法裁判所

パリ(1区)には、司法と行政それぞれの最高裁判所である破毀院と國務院(コンセイユ・デタ)に加え、憲法評議会(憲法院)も置かれている。

治安

セーヌ＝サン＝ドニ県、オー＝ド＝セーヌ県、ヴァル＝ド＝マルヌ県と同様にパリ警視庁の管轄下にある。

イル＝ド＝フランス地域圏で犯される重罪および軽罪は、フランス全土での4分の1を占める。パリ市内、その外側の「小さな王冠」(セーヌ＝サン＝ドニ県、オー＝ド＝セーヌ県、ヴァル＝ド＝マルヌ県)、さらにその外側の「大きな王冠」は、それぞれイル＝ド＝フランス地域圏内の全認知件犯罪のおおむね3分の1ずつが発生している。パリでみられる犯罪類型としては窃盗が大部分で、全重罪および軽罪の3分の2を占める。2006年には、25万5,238件が認知され、犯罪発生率としては人口1,000人あたり118.58件であった。これは、全国平均61.03%の約2倍であるが、大都市のみに限ってみれば平均的な数値である(リヨン109.22件、リール118.93件、ニース119.52件、マルセイユ120.62件)。女性被告人の割合は15パーセントを下回り(全国平均をわずかに下回る程度)、未成年の割合は11.02パーセント(全国平均18.33パーセントを7ポイント下回る)である。他方、外国人(有効な滞在許可証を所持しフランスに住居を有する者)の割合は、全国平均を上回る20.73パーセントである^{[22][23]}。

パリでは、2008年の強姦事件数1,413件で発生率が0.6%とフランス国内で2番目の高率であった^[24]。身体的暴行に関しては、2万7,857件であった^{[25][26]}。暴行を行うとの脅迫に関しては、2008年において、パリでは5,165件認知された^[27]。2008年の財産犯(窃盗、器物汚損、器物破壊)に関して、ブーシュ＝デュ＝ローヌ県に次ぐ件数が認知された^[28]。

パリの中央集権主義はまた、この街がテロの犠牲者であることをも物語る。よく知られるナポレオン1世に対するサン・ニケーズ街テロ事件や、最近では、**RER B線**サン＝ミッシェル＝ノートルダム駅での爆弾テロがある。パリの歴史はこれらの象徴的価値の高い事件が刻まれたものである。これらは、この街での日常生活にとって取るに足りないというものではない。特に、ヴィジピラート計画(Plan Vigipirate)^[29]の実施により、観光地や首都の戦略的要衝地の近くに武装した警察、憲兵および兵士が警備しているのを目にすることになる^[30]。

行刑施設

パリのいくつかの刑務所は今日でも有名である。

右岸のグラン・シャトレは、王の刑務所を内部に置き、その別館(左岸のプティ・ポンにあるプティ・シャトレ)とともに、14世紀から破壊される1782年まで投獄所および拘置場所とされていた。

コンシェルジュリー、バスティユ牢獄、ヴァンセンヌ城の3つの刑務所は、歴史的なシンボルとなっている。コンシェルジュリーはパリの裁判所固有の刑務所であったが、フランス革命の間にマリー・アントワネットやほかのギロチン犠牲者を迎えたあとも、1914年まで拘置所として機能し続けた。バスティユ牢獄は1370年から構築され、リシュリユが権力を振るっていたころに国の刑務所となった。ヴァンセンヌ牢獄は、やはり1784年まで国会の刑務所であったが、その名の通りの投獄の場というよりもむしろ軟禁場所であり、第二帝政下までしばしばそのように使われていた。

1830年から1947年まで11区にロケット刑務所があったが、パリで唯一残存する刑務所(兼拘置所)は1867年に開設されたサンテ刑務所のみである。イル＝ド＝フランス地域圏の主要な刑務所兼拘置所(Maison d'arrêt、メゾン・ダレ)は、フレンヌ（ヴァル＝ド＝マルヌ県）とフルリー＝ヌロジ（エソンヌ県）にある。ほかに、ボワシーにある困難受刑者が収容されるメゾン・サントラルがある。

気候

詳細は「パリの気候」を参照

西岸海洋性気候に属し、暖流である北大西洋海流の影響で高緯度の割には温暖である。夏(6月 - 8月)は気温が15度から25度までの範囲で、冷涼で乾燥しており過ごしやすいが、年間数日程度は32度を超える暑さとなる。しかし、2003年夏には30度以上の気温が数週間も続き、40度近い気温が観測され1万人以上の死者を出した。春(3月 - 5月)と秋(9月 - 10月)は天候は不安定で、暖かい時期と寒い時期が同居し、10月でも真冬並みの寒

ざとなることもある。冬（11 - 2月）は、もともと高緯度で昼間の時間が短いうえ、曇りや雨の日が多いため日照時間が少ないが、降雪・積雪はあまり見られない。年間数日程度は気温が氷点下5度以下まで下がる。しかしながら近年の冬は寒さが厳しく、2009年 - 2010年の冬にはパリ郊外では気温が-10度から-20度前後まで下がっているなど、寒気の影響を受けやすくなっている。年間降水量は652ミリほどであり、それほど多くはない。今までの最高気温は40.4℃（1948年7月28日）、最低気温は−23.9℃（1879年12月10日）である。

パリの気象観測は中心部から離れた14区にあるモンスーリ公園で行われている。



秋のパリ

パリ (モンスーリ公園、1981–2010)の気候													[隠す]
月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
最高気温記録 °C (°F)	16.1 (61)	21.4 (70.5)	25.7 (78.3)	30.2 (86.4)	34.8 (94.6)	37.6 (99.7)	40.4 (104.7)	39.5 (103.1)	36.2 (97.2)	28.9 (84)	21.6 (70.9)	17.1 (62.8)	40.4 (104.7)
平均最高気温 °C (°F)	7.2 (45)	8.3 (46.9)	12.2 (54)	15.6 (60.1)	19.6 (67.3)	22.7 (72.9)	25.2 (77.4)	25.0 (77)	21.1 (70)	16.3 (61.3)	10.8 (51.4)	7.5 (45.5)	16.0 (60.8)
日平均気温 °C (°F)	4.9 (40.8)	5.6 (42.1)	8.8 (47.8)	11.5 (52.7)	15.2 (59.4)	18.3 (64.9)	20.5 (68.9)	20.3 (68.5)	16.9 (62.4)	13.0 (55.4)	8.3 (46.9)	5.5 (41.9)	12.4 (54.3)
平均最低気温 °C (°F)	2.7 (36.9)	2.8 (37)	5.3 (41.5)	7.3 (45.1)	10.9 (51.6)	13.8 (56.8)	15.8 (60.4)	15.7 (60.3)	12.7 (54.9)	9.6 (49.3)	5.8 (42.4)	3.4 (38.1)	8.8 (47.8)
最低気温記録 °C (°F)	−14.6 (5.7)	−14.7 (5.5)	−9.1 (15.6)	−3.5 (25.7)	−0.1 (31.8)	3.1 (37.6)	2.7 (36.9)	6.3 (43.3)	1.8 (35.2)	−3.8 (25.2)	−14.0 (6.8)	−23.9 (−11)	−23.9 (−11)
降水量 mm (inch)	51.0 (2.008)	41.2 (1.622)	47.6 (1.874)	51.8 (2.039)	63.2 (2.488)	49.6 (1.953)	62.3 (2.453)	52.7 (2.075)	47.6 (1.874)	61.5 (2.421)	51.1 (2.012)	57.8 (2.276)	637.4 (25.094)
平均降水日数 (≥ 1.0 mm)	9.9	9.0	10.6	9.3	9.8	8.4	8.1	7.7	7.8	9.6	10.0	10.9	111.1
平均降雪日数	3.0	3.9	1.6	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	2.1	11.9
% 湿度	83	78	73	69	70	69	68	71	76	82	84	84	75.6
平均月間日照時間	62.5	79.2	128.9	166.0	193.8	202.1	212.2	212.1	167.9	117.8	67.7	51.4	1,661.6
日照率	22	28	35	39	42	42	43	49	43	35	26	21	35.4
出典 1: Meteo France ^{[31][32]} , Infoclimat.fr (humidity 1961–1990) ^[33]													
出典 2: Weather Atlas (percent sunshine) ^[34]													

地理

市内の各地域

右岸

シャンゼリゼ通り(8区)

凱旋門からテュイルリーまで続く、パリを代表する目抜き通り。パリの歴史軸を構成する。交差するモンテーニュ通りとジョルジュ＝サンク通りとに区切られた三角地帯は俗にラグジュアリー関連の「ゴールデン・トライアングル」と呼ばれている。

サントノレ通り(1区)

フランスの高級ブランドの本店が並ぶ、世界屈指の高級ブランド街。ヴァンドーム広場、コンコルド広場、ルーヴル美術館、テュイルリー庭園に囲まれたパリ中心部の通り。8区内でシャンゼリゼ通りと並走するフォーブール＝サントノレ通りに続いていく。

シテ島(1区、4区)

パリ発祥の地であり、ノートルダム大聖堂など歴史的建造物も多い。

パッシー(16区)

高級住宅地。

オペラ界限(2区、9区)

デパートや高級洋服店、銀行などが立ち並び、日本料理店や日本の生活雑貨店が並ぶ日本人街でもある。実際の在仏日本人が比較的多く住むのは15



凱旋門

区や16区など。「パリの日本人コミュニティ」も参照。

マレ(3区、4区)

貴族の館が集中して残る地域であり、現在は裕福なユダヤ系住民が多く住む。美術館や画廊も多い。お洒落なゲイの集まる地域でもある。

バステューユ(4区、11区、12区の各境)

フランス革命の発端となった場所として有名だが、今では若者が集まる歓楽街となっている。オペラ・バステューユもある。

オベルカンフ(11区)

同じく歓楽街だが、比較的新しい。テクノ音楽やゲームなど新しい文化を紹介する場として認識され、アニメ店なども複数見られる。

ピガール、ブランシュ(18区)

モンマルトルのふもとに位置する。高級キャバレー「ムーラン・ルージュ」があるが、その他は怪しげなキャバレーやいかがわしいセックス店が多く並ぶ性的歓楽街でもある。昔から猥雑な界限であり、永井荷風の「ふらんす物語」にも描かれている。

モンマルトル(18区)

パリを見下ろす高台。パリ市に編入されたのは1860年以後だが、現在ではパリを代表する名観光地となっている。2001年のフランス映画『アメリ』の舞台にもなった。サクレ・クール寺院が一番の高台にそびえ、そこから西側へ行くにつれテルトル広場やムーラン・ド・ラ・ギャレットなど観光名所が多く並ぶ。寺院東側は観光地ではなくアフリカ系移民が多く暮らすシャトー・ルージュ地区。

ベルシー(12区)

昔は倉庫街だったが今は再開発が進み、フランス財務省やベルシー公園、ワイン倉庫街を改造したレストラン街・商店街などが新しい観光地となっている。

ベルヴィル(19区、20区)

もともとはパリ郊外のコミューンだったが、1860年にパリに編入された。ピエ・ノワール(コロネ)、東欧系南欧系ヨーロッパ人から始まり、現在ではアラブ系、アフリカ系、ユダヤ系(労働者系)、中国系(華僑)に至るまで、おもに労働者系の多くの移民が暮らす地域である。安くて異国的なレストランなどが集中する。名前とは裏腹に雑多で庶民的な界限であるが、近年ベルヴィル公園が整備され、再開発が進んでいる。エディット・ピアフの生地でもある。トルビヤック地区に次いで、1970年代以降パリ第2の中華街が形成されつつある。

バルベス(18区)

ベルヴィル、シャトー・ルージュと同じくアラブ系やアフリカ系の移民が多く暮らす。有名な安物服屋やアフリカ系商店街があり、人口密度も多く、駅前には常に混雑している。10区のパサージュ・ブラディ界限はインド系・パキスタン系街。

左岸

モンパルナス(14区)

異様な雰囲気を残す左岸の地域。

サン＝ジェルマン＝デ＝プレ(6区)

歴史的地区であり、美術学校に近いことから画廊も多い。サルトルら哲学者が集まった場所として有名な2軒の喫茶店がある。カルチエ・ラタンに隣接する。

カルチエ・ラタン(5区、6区)

ソルボンヌ大学をはじめ大学が集中しており、昔から学生街として有名。カルチエは「地区」、ラタンとは「ラテン語」のことであり、「ラテン語を話す、教養のある学生が集まる地区」という意味が語源。羅典区。

エッフェル塔とシャン・ド・マルス公園(7区)

パリを代表する観光名所としてあまりに有名。セーヌ川の観光船のうち有名な2つの船の発着点ともなっており、観光客が集中する。

トルビヤック(13区)

いわゆる中華街だが実際はベトナム系が多く、中華・ベトナム料理店が並ぶ。昔はゴブラン織りで栄えたが、今は高層ビルが林立する再開発地域である。

郊外

詳細は「イル＝ド＝フランス地域圏」を参照

「バンリュー」も参照

パリの郊外にはヴェルサイユなど有名な観光地がいくつかあり、そのほとんどはパリから日帰りで往復できる。

16区 - 17区につながるセーヌ川下流の西部方面には閑静な高級住宅地が広がっている。逆に18区 - 20区からつながる北東方面は低所得層の集まる地価の安い郊外となっており、近年は犯罪増加などの問題を抱えている。フランスで単に「郊外(バンリュー)」という場合、こうした地域を婉曲的に指すことが多い。その他の方面の郊外は一般的な住宅衛星都市となっている。



シャンゼリゼ通り



オペラ・ガルニエ(オペラ座)



エッフェル塔

パリより電車で各30分ほど離れた郊外にはいくつかの衛星都市があり、近代建築によって町の機能が整えられている。中でもラ・デファンス地区には「新凱旋門グランドルシュ」をはじめ高層ビル群が集中しており、多数の企業の支店を抱える新都心となっている。

河川

セーヌ川

パリ市内を横断する川であり、パリのセーヌ河岸は世界遺産に登録されている。パリではセーヌ川の北部を右岸(**Rive Droite**)、南部を左岸(**Rive Gauche**)という。パリ市中心部にある川中島であるシテ島は、パリ市発祥の地である。シテ島の東にもうひとつサン・ルイ島という島がある。セーヌ川は重要な運路であり、パリ市内では観光船のほか運搬船も多く行き来する。パリ市東部郊外のごく近い場所でセーヌ川とマルヌ川が合流し、ベルシーからパリに入り、途中サン・ルイ島とシテ島を抜け、アンヴァリッドのあたりで南西に折れ曲がり、そのまま15区と16区を抜けていく。パリを抜けたあとは蛇行を繰り返し、ノルマンディー地方を経て大西洋へと流れていく。パリ市内には多くの橋がかかっており、歴史やいわくのある橋も多い。詳細はセーヌ川の項を参照。



左:セーヌ川にかかるポン・デ・ザールとポン・ヌフ(東向き)／右:セーヌ川にかかるボンデザール(西向き)



ノートルダム大聖堂付近のパノラマ

ビエーヴル川

13区のトルビヤック地区やゴブラン地区には、セーヌ川の支流であるビエーヴル川という自然の川がかつて流れていた。エソンヌ県に端を発する小規模な川で、パリ市の直前で暗渠に入る。今はパリ市内では暗渠として完全に地下化してしまい、現在の一般の地図上でその存在を確認することはできないが、古地図などでその川の流れを見ることができる。かつてはこの川を利用してゴブラン織の染色が行われていた。国立手工芸製作所(ゴブラン織り工場)はこの川の上に存在する。現在、このビエーヴル川の一部を暗渠から再び掘り返して親水公園にする計画が立ち上がっている。

運河

サン・マルタン運河

パリ東部セーヌ右岸を南北に流れる運河。セーヌ川に面したサン・マルタン運河の出入口はアルスナル港という。ここからバ스티ーユ広場を経て、運河は地下水道となる。10区に入ったあたりで運河は地上に顔を出す。この辺りには水位を上下するための水門(閘門)がいくつかある。10区の運河沿いにはかつて革製品などの町工場が多く並んでいたが、今はそれらの工場は衰退しており、徐々に再開発の動きが進んでいる。最近では、景観を生かしてレストランが並ぶ。10区と19区の境にある地下鉄2号、5号、7号線のジョレス駅およびスタリングラッド駅付近にあるラ・ヴィレット運河まで出たところで、サン・マルタン運河の名称は終わる。今はサン・マルタン運河を走る運搬船はほとんどないが、観光船が走っている。

ウルク運河

サン・マルタン運河と一続きの運河だが、ラ・ヴィレット運河より以北はこの名称になる。パリ19区からパンタン市へ、さらに遠方のウルク川へとつながっている。メトロ5番は、終点、ボビニー＝パブロ・ピカソ駅手前でこのウルク運河沿いの地上部を走る。ラ・ヴィレット公園の手前でサン・ドニ運河と分岐(合流)している。

サン・ドニ運河

ラ・ヴィレット公園の手前でサン・ドニ運河と分岐・合流している。パリ市内では19区のごく一部を流れる。パリ郊外のオーベルヴィリエ市、サン＝ドニ市を経て、パリ北部で蛇行するセーヌ川下流と合流する。ウルク運河経由で水路をショートカットするためにつくられており、運搬船が頻繁に行き来している。



サン・マルタン運河



ラ・ヴィレット公園内のウルク運河

広場、公園、森

広場

コンコルド広場(1区)

パリの中心部、テュイルリー庭園とシャンゼリゼ通りに挟まれて位置する。歴史ある広場で、フランス革命の後にはルイ16世やマリー・アントワネットの処刑が行われた。現在はツール・ド・フランスの終着点としても知られ、最終日には多くの愛好者が集まる。

ヴァンドーム広場(1区)

アウステルリッツの戦いに勝利した記念にナポレオン・ボナパルト像の円柱が立っている。この広場および隣接するサントノーレ通りには、(日本でのみ「گرانサンク」と呼ばれている)五大高級宝飾店のほか、高級洋服店などが並ぶ。

バ스티ーユ広場(4区、11区、12区の各境)

フランス革命の発端となったバ스티ーユ襲撃の際のバ스티ーユ要塞があった場所で、要塞は革命後に取り壊されて現在の広場となった。広場中央にはバ스티ーユの象に置き換わり1830年におきた七月革命の記念柱が立っている。広場に面してオペラ・バ스티ーユがある。サン・マルタン運河出入口のアルスナル港にも面している。

ヴォージュ広場(4区)

バ스티ーユ広場のすぐ近くだが奥まった場所にあり、赤い煉瓦と石造りの建物に囲まれたほぼ正方形の広場である。その赤い建物の一角にはヴィクトル・ユゴーの住んだ家がある。フランス革命前は国王(ロワイヤル)広場と呼ばれていた。

サン・ミッシェル広場(6区)

カルチエ・ラタンの中心部に位置し、セーヌ川および対岸のシテ島、ノートルダム大聖堂に面している。本屋などが多くあるほか、広場裏手には安手のレストランが立ち並ぶ。

シャルル・ド・ゴール広場(エトワール広場)(8区)

アウステルリッツの戦いに勝利した記念に建立されたエトワール凱旋門を中心に、シャンゼリゼ通りを含め放射状に道路が伸びる、パリの顔とも言うべき広場。元はエトワール広場と呼ばれたが、第二次世界大戦後シャルル・ド・ゴール将軍をたたえて現在の呼称となった。通常はエトワール広場の呼称でも通じる。1860年のパリ拡張以前はパリの西の玄関だった。

レピュブリック広場(3区、10区、11区)

訳すと共和国広場。フランス共和国の象徴マリアンヌ像が置かれている。庶民的な地区に位置するが、広場としてはきわめて大きいそののひとつ。マニフェスタシオン(抗議集会)がある際にはほとんどここが起点となる。

ナシオン広場(11区、12区)

エトワール広場と同じく道が放射状に伸びる、1860年以前のパリの東の玄関。1841年、バ스티ーユの象の同広場への移設計画もあったが1843年に頓挫し^[35]、第二帝政時代に凱旋門が再建された^[36]。現在、「共和国の凱旋像」と2つの柱が立っている。ロベスピエールの恐怖政治時代にはここで多数の反体制者がギロチンで処刑された。

テルトル広場(18区)

モンマルトルがパリに編入される以前はこの広場が村の中心だった。現在は絵描きが多く並ぶ一大観光名所となっている。

イタリア広場(13区)

フォンテーヌブロー宮殿方面に向かうパリの南の玄関口。

公園、庭園

公園はパルク(Parc)、庭園はジャルダン(Jardin)と呼ばれ区別されている。

テュイルリー庭園(1区)

パリの中心部、ルーヴル宮の正面に位置する。かつてテュイルリー宮殿があった。

リュクサンブール庭園(6区)

リュクサンブール宮殿(現・フランス上院議会)の正面に位置する庭園。カルチエ・ラタンに隣接し、学生たちの憩いの場でもある。

シャン・ド・マルス公園(7区)

エッフェル塔に登るとまず目に入るのが眼下に広がるこの公園の全景である。かつては軍事演習場だったところ、第2回目となる1867年パリ万博から数次の万博会場にもなった。

モンソー公園(8区)

1860年のオスマン男爵によるパリ大改造で公園に整備された。

ベルヴィル公園(20区)

主要なベルヴィル地区に位置する。高台になっており、パリを一望できるとても眺めのいい公園。

ピュット・ショーモン公園(19区)

同じく1860年のパリ大改造で整備され、昔の石切場跡を公園にした。

パリ植物園(5区)

その名の通り植物園で、動物園も併設する(ただしヴァンセンヌの森のパリ動物園よりは小さい)。敷地内には自然史博物館がある。

モンソー公園(14区)

これも1860年のパリ大改造で整備された。14区の外れにあり、国際大学都市に面している。

ジョルジュ・ブラッサンス公園(15区)

馬市場、家畜市場の跡を整備した公園で、銀色の巻貝のような劇場を併設する。馬市場の跡の19世紀の鉄骨屋根のテントの下では、定期的に古本市が開かれる。



コンコルド広場



バ스티ーユ広場



ヴァンドーム広場



シャルル・ド・ゴール広場



テュイルリー庭園



リュクサンブール庭園

ラ・ヴィレット公園(19区)

主要な地区に属するが、かつての食肉処理場跡および旧鉄道用地の広大な敷地を再開発して公園とした。広大な敷地内にはサン・ドニ運河が流れる(サン・マルタン運河につながる)。代表的な建物として、食肉処理場時代の**19世紀**の鉄骨建築ホールをそのまま流用した**グランド・アール**(見本市会場)、**科学産業都市**(博物館)および**音楽都市**(クラシック用コンサートホール)、**ZENITH**(ロック・ポップス用コンサートホール)、**パリ国立高等音楽院**現校舎などがある。

アンドレ・シトロエン公園(15区)

自動車会社**シトロエン**の工場跡および鉄道敷地跡を整備して公園にした。大きな芝生の広場がある公園で、現代的なデザインである。

ベルシー公園(12区)

フランソワ・ミッテラン元大統領により整備された。**フランス財務省**の新建物に面している。付属の**ベルシー・アリーナ**では運動のほか演奏会なども行われている。

アクリマタシオン庭園(16区)

ブローニュの森の北側にある子ども向けの公園(遊園地)。



シャン・ド・マルス公園

森

パリには東西2つの大きな森があり、パリ市民の憩いの地となっている。現在はこの森もパリ市の敷地に含まれる。

ブローニュの森(16区)

パリの西側に位置する。高級住宅街の**16区**パッシーやオートウイユの他に、隣接ヌイイ＝シュル＝セーズなど近郊の高級住宅街に面し、高級社交場でもあるオートウイユ競馬場や、凱旋門賞などが行われる**パリロンシャン競馬場**も併設する。バガテル・バラ園があるバガテル庭園やバガテル城、ロンシャン城などがある高級的な雰囲気の漂う森である。ただし夜暗くなつてからは**ゲイ**が集うことでも知られる。



ブローニュの森

ヴァンセンヌの森(12区)

パリの東側に位置する。国立移民史博物館(旧**アフリカ・オセアニア博物館**)のほか、水族館、**パリ動物園**、**農園**(パリ唯一の農場になる**パリ熱帯農園**)、**パーク・フローラル**(**パリ花公園**)などを併設する。中世の砦だった**ヴァンセンヌ城**もある。

四大墓地

パリは東西南北に4つの主要な墓地があり、多くの著名人が眠っている。

- **ペール・ラシェーズ墓地**(20区)：東
- **パッシー墓地**(16区)：西
- **モンパルナス墓地**(14区)：南
- **モンマルトル墓地**(18区)：北

この他、パリ中心部に位置する**パンテオン**にも**ルソー**や**ヴォルテール**、**ヴィクトル・ユーゴー**、**デカルト**といった偉人たちが埋葬されている。



バンテオン

観光

パリは世界屈指の観光都市である^[注 1]。

「芸術の都」などのイメージを前面に出す戦略をとっている。

おもな集客装置は、歴史的な建造物の数々(世界遺産「**パリのセーズ河岸**」に入っている建物など)、数々の美術館に収められた著名な**美術品**、有名料理店で提供される**フランス料理**、高級銘柄を扱う店舗などである。

建造物は、中世以前のものも残るが、第三共和政期のパリ改造やベル・エポックの建造物、あるいはフランス革命200周年期のグラン・プロジェの建造物など、各時代の世界の最先端のものが多い。美術館には、フランスで活躍した著名な芸術家の美術品の他、**戦利品**や購買によって収集された世界一級の収蔵物が並ぶ。

→#主な観光名所

主な観光名所

- 建造物
 - **凱旋門**
 - **エッフェル塔**
 - **エリゼ宮**
 - **ガルニエ宮**(オペラ座)

- アンヴァリッド(廃兵院)
- ノートルダム大聖堂
- パレ・ド・ジュスティス
- オペラ・バステューユ
- ポンピドゥー・センター
- サクレ・クール寺院
- マドレーヌ寺院
- パンテオン
- シャイヨ宮
- 美術館
 - ルーヴル美術館
 - オルセー美術館
 - オランジュリー美術館
 - ロダン美術館
 - マルモッタン美術館
 - ケ・ブランリ美術館
 - ルイ・ヴィトン美術館
- その他
 - ムーラン・ルージュ
 - プランタン
 - ラ・デファンス

劇場・劇団・コンサートホール・楽団

- オデオン座
- オペラ＝コミック座
- オペラ・ガルニエ(日本で「オペラ座」と呼ぶのはこちら)
- オペラ・バステューユ
- オランピア劇場
- ゲテ・モンパルナス劇場
- コメディ・フランセーズ
- サル・ガボー
- ヴィユ・コロンビエ劇場
- シテ・ドウ・ラ・ミュージーク
- シャイヨー国立劇場
- シャトレ座
- シャンゼリゼ劇場
- パリ市立劇場
- ボビノ劇場
- マデレーン座
- モガドール劇場
- ユシット座
- ラ・シガール
- ラ・スプレンディド
- サル・プレイエル
- パリ管弦楽団



ノートルダム大聖堂



ルーヴル美術館



ムーラン・ルージュ

文化

「芸術の都」という異名が言い表すように、パリは美術・音楽・演劇・バレエ・食文化・ファッションなど、さまざまな芸術の世界的な中心地として名を馳せている。1989年には欧州文化首都に選ばれた。

美術

ルーヴル美術館やオルセー美術館、ポンピドゥーセンター（国立近代美術館）などの美術館に世界一級のアート作品が多数収蔵され、ざっくりと時代ごとに美術館が割り振られている。古代から19世紀半ばまでのアート作品はルーヴル美術館で観ることができ、モナ・リザ、サモトラケのニケ、ミロのヴィーナスなど世界中の誰もが知っている名作をはじめとして、ナポレオンがエジプト遠征時に集めた古代エジプトの考古学品なども含めて常設展示数はおよそ2万6,000点で（展示しきれない総所蔵作品数は30万点以上）、ざっと観ても数日かかり、全部じっくり観ると1か月ほどかかるとも言われる。ルーヴルは建物自体もかつての王宮であり、入場者数は年間800万人以上である。19世紀以降の絵画、つまり印象派、象徴主義、アール・ヌーボーの絵画などはオルセー美術館に展示されている。

演劇

世界で一番歴史の長い劇団、1680年創設のコメディ・フランセーズがあり、同名の劇場でその舞台を観ることができる。

バレエ

パリには1661年に王立舞踏アカデミーとして創設された世界最古のバレエ団「パリ国立オペラ」があり、旧オペラ座のガルニエ宮や新しいオペラ・バステューユでその公演を観ることができる。

音楽

パリは音楽都市のひとつである。シャンソンを聞かせるライブハウスがいくつもある。

パリには管弦楽団が多数あり、コンサートが頻繁に行われている（一時期は世界一流のレベルだったが近年はいくらか厳しい評価も聞かれる）。

毎年夏至の日6月21日にはFête de la musique（音楽祭）がフランス全土で開かれ、パリでもさまざまな場所でさまざまなジャンル（ジャズやブルースなども含めてさまざまなジャンル）の音楽の演奏が行われる。

Conservatoire de Paris コンセルヴァトワール・ドゥ・パリ（パリ国立高等音楽・舞踊学校）があり、世界から才能のある若者が一流のバレエや音楽を学びにやってくる。

食文化

パリはガストロノミー（食によるおもてなし、食文化、一流の料理作り）の中心地でもあり、有名なレストランがいくつもあり（ギッド・ミシュランでは三ツ星が例年10店前後）、世界で最高レベルのシェフの料理を堪能することができる。2ツ星の店も多数。またフランス料理を習得しようとしている若い料理人（の卵）たちがそれら有名店で修行に励んでいる場所でもある。料理競技会も開催されている。

その他

16世紀前半の神聖ローマ皇帝カール5世は、フランス国王フランソワ1世の生涯の宿敵でありながら、フランス文化を、それ以上にパリの文化をこよなく愛し、18世紀の啓蒙時代には、プロイセン王国中興の祖であるフリードリヒ2世はヴォルテールと交流しパリから招き、また、ロシア帝国女帝エカチェリーナ2世はヴォルテールやドニ・デイドロと交流し、デイドロをパリから呼び寄せた。

経済

フランスにおける経済の中心地であり、世界屈指の経済都市でもある。2014年のパリ都市圏の総生産は6,798億ドルであり、東京都市圏、ニューヨーク都市圏、ロサンゼルス都市圏、ソウル都市圏、ロンドン都市圏に次ぐ世界6位の経済規模を有する^[37]。

多国籍企業の本社数や資本市場の規模などビジネス分野を総合評価した都市ランキングでは、ロンドンとともにヨーロッパでトップクラスである。**BNPパリバ**、**トタル**、**アクサ**など世界有数の大企業の本社が所在しており、世界500大企業の本社数では、ニューヨークやロンドンを凌ぎ、西洋の都市では最多である^[38]。

工芸品や贅沢品や服飾品などの、ビジネスの集積地でもある。

アンシャン・レژیムの時代では、貴族は服をたった1着手に入れるにも、まずは布地を扱う商人のところへ行行って気にいる布地を苦勞して見つけ、次にその布を裁断する職人のところへそれを持って行って、次にそれを縫いあげる職人、と何軒もの店・職人をかけずりまわらなければならず^[39]、おまけに訪ねる店は（現代からは想像もつかないような）まるで倉庫のようなありさまで、価格の表示もなく、客は顔色をうかがわれてとんでもない高値を吹かけられ、支払いも高利の掛け売りというありさまで、皆、服を手に入れることにうんざりしていた^[39]。だがアンシャン・レژیム末期のパリに、新しい経営方法を導入した服飾品の小売業者やモード商人が登場した。それまで注文を受ける側であった商人が、主導権を握って王妃などに着る服を提案することを始めたのであり、王族を宣伝塔として巧みに利用し流行を意図的・恣意的に作りだし、貴族たちを煽って金儲けをするようになった^[39]。19世紀



左:『ラ・ジョコンダ』(モナ・リザ)ルーヴル美術館収蔵／右:ゴッホ『オーヴェルの教会』(オルセー美術館収蔵)



ガルニエ宮の内部。世界最古のバレエ団のバレエを観賞し、かつての王や貴族の生活に想いを馳せたり、シャガールの天井画を堪能したりすることができる



6月21日のFête de la musique（音楽祭）(1er arrondissement, 2008年)

にはさらにオートクチュール(オーダーメイド服)への道を開き、ファッションショーなどを開催し、メディアも活用し巧みにイメージを作りだし、新興の富裕層(＝ブルジョワジー)の欲望を掻きたて金儲けを行った^[39]。しかしオートクチュールのビジネスは20世紀後半には衰退し、現在では主としてプレタポルテを扱うようになった。ショーの華やかな見た目に惑わされている一般人には見えないが、ファッションウィーク期間中のパリというのは、デザイナー側とバイヤー側が直接に会してビジネス上の冷徹でしたたかな交渉が行われる商業(ビジネス)の空間でもある。

「フランスのファッション」も参照

若い女性の中には、商人によって金儲けのためにビジネスのツールとして作りだされ、雑誌などの各種メディアで流されている虚像を本当の像だと信じ、その像に近づこうとパリにフワフワとやってきてしまう女性もいる。日本の若い女性でも、パリに来て長期間その実態を自分の目で見えるうちに、自分が虚像を信じていたにすぎないことに気づかされ、やがて鬱状態になったり責められているように感じ苦しんで帰国していく事例も指摘されている。→パリ症候群を参照のこと。

主だった企業

各節とも日本語での五十音順。パリ近郊に本社を置く企業も含める。



2011年パリのファッション週間。パリの商人たちは、商品を同業者らに一連のショーを使って見せては大量の売買契約を結び、同時にマスコミにもイメージを流す、という巧みなビジネス手法を発展させた

企業本社

- アクサ (AXA)
- インターナショナル・ニューヨーク・タイムズ (旧インターナショナル・ヘラルド・トリビューン)
- エア・リキード (Air Liquide)
- エールフランス
- LVMH
- エンジー
- Orange (旧フランス・テレコム)
- カルフル
- グループPSA
- クレディ・アグリコル
- ケリング
- サノフィ
- サフラングループ
- ジーセードウコー
- ソシエテ・ジェネラル
- ソデクソ
- ダッソー
- ダノン
- タレス・グループ
- テクニカラー
- トタル
- パブリシス
- ヴィヴェンディ (傘下にCanal+グループやユニバーサル ミュージック グループなど)
- ビック
- ブイグ
- フォション (FAUCHON)
- フランス国鉄 (SNCF)

ファッション、ラグジュアリーブランド

- アニエス・バー
- イザベル・マラン (Isabel Marant)
- イネス・ド・ラ・フレサンジュ
- イヴ・サロモン (Yves Salomon)
- イヴ・サン＝ローラン (サン＝ローラン)
- ウビガン
- エーグル
- エス・テー・デュボン
- エマニュエル・ウンガロ
- エルザ・スカパレッリ (スカパレッリ)
- エルベ・シャブリエ
- エルメス
- エレス (Eres)
- オーバドゥ (Aubade)
- カール・ラガーフェルド
- カルティエ
- ギ・ラロッシュ (Guy Laroche)
- クリスチャン・ディオール (ディオール)
- クリスチャン・ラクロワ (Christian Lacroix)
- クリスチャン・ルブタン
- クレージュ
- グレ (マダム・グレ)
- クロエ
- クロエ・ストラ (Chloé Stora)
- ゲラン
- ケンゾー (高田賢三)
- ゴヤール (Goyard)
- ザディグ・エ・ヴォルテール (Zadig & Voltaire)

- フランス通信社(*AFP*)
- フランス・テレビジョン
- フランス電力
- フランス24
- BNPパリバ
- ルノー
- ル・パリジャン
- ル・フィガロ
- ル・モンド
- レキップ
- ロレアル
- シネクアノン(*Sinéquanone*)
- ジバンシイ
- シャネル
- ジャマン・ピュエツシュ(*Jamin Puech*)
- シャルベ(シャルベ・プラス・ヴァンドーム、*Charvet Place Vendôme*)
- ジャン＝シャルル・ド・カステルバジャック(*Jean-Charles de Castelbajac*, カステルバジャック)
- シャンタル・トーマス(*Chantal Thomass*)
- シャンテル(*Chantelle*)
- ジャン＝ポール・ゴルチエ
- ジャン＝ルイ・シエレル
- ジェローム・ドレフュス(*Jérôme Dreyfuss*)
- ショーム(*Chaumet*)
- セフォラ
- セリーヌ
- ソニア・リキエル
- チエルツティ(*Cerruti*)
- ティエリー・ミュグレー(ミュグレー)
- デヴァステ(*Dévastée*)
- ドミニク・シロ(*Dominique Sirop*)
- ニナ・リッチ
- バカラ
- パコ・ラバンヌ(*Paco Rabanne*)
- バルマン(*Balmain*)
- バレンシアガ
- ピエール・カルダン
- ヴァンクリーフ&アーペル
- ブシュロン
- プランセス タム・タム(*Princesse tam.tam*)
- ブルジョワ パリ
- ブレゲ
- ベルルツティ(*Berluti*)
- マージュ(*Maje*)
- メゾン・マルタン・マルジェラ
- メリオ・ディ・メレー(*Mellerio dits Meller*)
- モーブッサン
- モラビト
- モロー(*Moreau*)
- モワナ(*Moynat*)
- ラリック
- ランセル
- ランバン
- ルイ・ヴィトン
- ルシアン・ペラフィネ(*Lucien Pellat-Finet*)
- ルヴィヨン・フレール(*Revillon Frères*, ルヴィヨン)
- ロシャス
- ロジェ・ヴィヴィエ(*Roger Vivie*)
- ロックスウッド(ロックスウッド・ル・パリジャン・カバ、*Loxwood Le Parisien Cabas*)

社会情勢

人口

パリ市の人口は2011年現在、約225万人で^{[[注 2](#)]}、近年は微増傾向にある。特に、再開発が進む南部や移民流入の著しい東部での人口増加が目立っている。

この間、郊外(市域外)の人口は増加している。20世紀以降、かつて城壁に囲まれていた市域外にも市街地が大きく拡大し続け、現在、イル＝ド＝フランス地域圏(パリ地域圏)全体の人口は1,198万人にのぼる。パリ市域内もおおむね商業・業務・住宅地としての活気と威信を維持しており、アメリカの大都市などで見られる都心部の荒廃や郊外への人口流出(インターシティー問題)はさほど見られない。むしろ、移民の多い一部の郊外での治安の悪化が顕著である(バンリユー参照)。

パリの人口の推移

年	1801	1851	1881	1926	1999	2005
人口	54万7800	105万3000	224万0000	287万1000	212万5946	215万4000

世帯構成

パリはほかの大都市同様、学生、若者、老人が多い一方、子供を有するカップルの割合は低い。1999年、パリ市の世帯数の22パーセント、人口数の40.7パーセントは1人以上の子供を有するカップルであったが、単身世帯数の割合は27パーセント、カップルのみの世帯数の割合は19パーセントであった。パリ市では47パーセント(フランス全体の平均は35パーセント)の人々が独身で、37パーセント(同50パーセント以上)が結婚している。また片親世帯の割合が26パーセント(同17パーセント)と高い。離婚率ももっとも高く、婚姻100件のうち55件は離婚に至っており、パリ市民の7.7パーセントを占めている。

出生率は1,000人中14.8人であり、国平均の13.2パーセントより高い。一方、子どもの数は世帯あたり1.75人で、国平均の1.86人より少ない。半分の世帯において子どもは1人である。パリ市では住居が狭く高額であることが、その主因である^{[[40](#)]}。

経済格差

高所得者層はおもに西部に、低所得者層や移民はおもに北東部に居住している。

パリ市の平均世帯所得はフランス全体の平均より高く、隣接する郊外のオー＝ド＝セーヌ県、イヴリーヌ県、エソンヌ県、ヴァル＝ド＝マルヌ県の4地域の平均所得も国内で最高水準であり、イル・ド・フランス地域圏に高所得者層が集中している。

しかしパリ市内の社会的格差の状況は、さらに複雑である。伝統的には豊かなパリ市西部と、貧しいパリ市東部という構図がみられる。実際、7区の平均世帯所得(2001年)は3万1,521ユーロにのぼり、19区の1万3,759ユーロの2倍以上となっている。イル・ド・フランス地域圏において、パリ6区、7区、8区、16区はもっとも高所得の地域、10区、18区、19区、20区はもっとも低所得の地域に分類される。さらに、市内の19区の状況はそのまま所得が低い北東部郊外のセーヌ＝サン＝ドニ県に連なる一方、16区の外縁は西部の豊かな郊外に続く。

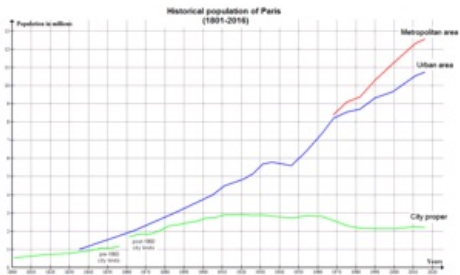
18区、19区、20区にはパリの貧困層の4割が集中し、学校の中退、失業、健康問題などが集中している。EU域外からの移民は、フランス国内の出身者に比べて、貧困な状況に置かれていることが多い。

移民

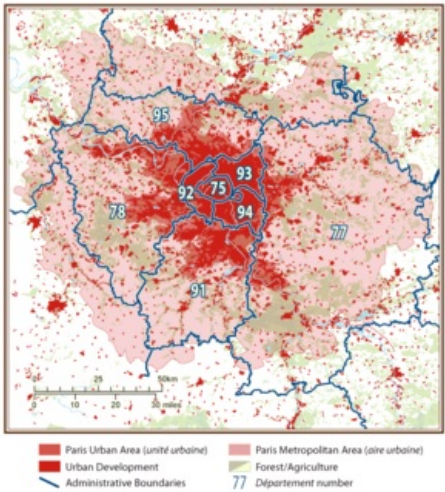
18区はマグリブや、最近サブサハラ地域のアフリカからの移民が多い。フランスの国勢調査では法律上、民族や宗教の属性を問うことができないが、出身地の情報は得ることができる。1999年の国勢調査によると、パリ都市圏はヨーロッパでもっとも多民族化が進んでいる地域のひとつであり、人口の19.4パーセントがフランス本国外の出身である^{[[42](#)]}。また、パリ都市圏の人口の4.2パーセントは1990年から1999年の間にフランスにやってきた新しい移民であり、その大半は中国またはアフリカ出身である^{[[43](#)]}。さらにパリ都市圏の人口の15パーセントはイスラム教徒である。

「ジブシー」も参照

パリへの大量の移民の第一波は1820年代、ドイツの農民が、農業危機とナポレオン・ボナパルトの侵攻にともなって移住してきたことによる。その後、今日に至るまで、何度か移民の波が続いている。19世紀はイタリア人と中央ヨーロッパのユダヤ人、1917年のロシア革命後はロシア人、第1次世界大戦中は植民地の国々から、大戦間期はポーランド人、1950年代から70年代はスペイン人、イタリア人、ポルトガル人、北アメリカ人、またアフリカ・アジア地域の独立後はユダヤ人が移民してきた^{[[44](#)]}。移民の居住区域は、それぞれ出身地ごとに異なっている。



人口推移(1801年から2008年)



パリ都市圏の人口分布



パリの地区毎の年間平均所得の分布^{[[41](#)]}

教育

初等・中等教育

詳細は「[fr:École primaire en France](#)」および「[fr:Liste des collèges et lycées de Paris](#)」を参照

2005年から2006年の学校年度における公立学校の児童・生徒数は、26万3,812人であった。うち13万5,570人が初等教育、12万8,242人が中等教育を受けていた。同年度の私立学校の児童・生徒数は13万8,527人で、うち9万1,818人が契約に基づく就学であった。パリには、優先的教育地域(ZEP)または優先的教育組織(REP)の施設(小学校214校、コレージュ32校。5人に1人の割合)がある。

2007年現在、881校の公立学校があり、うち323校が幼稚園、334校が小学校(日本の5年生までに相当)、6校が病院内学校、110校がコレージュ(日本の小学6年生および中学生に相当)、72校がリセ(普通および科学技術とも含む)、34校が職業リセおよび2校が公的実験リセである。他方、契約に基づき入学する私立学校は256校であり、うち110校が幼稚園・小学校・特別学校、67校がコレージュ、73校がリセ(普通および科学技術)および5校が職業リセであった。

中等教育については、5区にそれぞれ所在するリセ・ルイ＝ル＝グランやリセ・アンリ＝キヤトルが全国的かつ国際的にも有名である。

高等教育

2007年現在、イル＝ド＝フランス地域圏では約58万5,000人が高等教育を受けており、フランス全土の4分の1強にあたる。特に1990年代のフランス国立行政学院のストラスブール移転や高等師範学校のリヨン校などの脱中央化の動きもみられるが、大部分の名高い国立学校は常にパリ地方に設置されている。

歴史

12世紀以降、パリはヨーロッパにおける知識の大集積地のひとつで、特に科学技術と哲学分野に秀でていた。フィリップ2世が大学の構成員に対して特権与えた西暦1200年はパリ大学の設立の年とされ、人々に象徴的に記憶されている。そこでは教育が行われた場所である寄宿舎(寄宿学校)が学部を構成した。ソルボンヌ寮の創設は1257年を起源とする。大学は、サント＝ジュヌヴィエーヴの丘を中心として、カルチエ・ラタンに発展した。カルチエ・ラタンは、現在でも、パリ大学を含む高等教育機関の重要な中心地である。

18世紀以降、いくつかの専門職のために専門化された高等教育機関が創設され、現在のグランゼコールの起源となった。エコール・ポリテクニークおよび高等師範学校はともにフランス革命期に創設された。近代のパリ大学は、19世紀、法・医・薬・文・神・理の6学部に組織化された。20世紀、五月革命後には多くの学生が強く社会問題を考えたが、ソルボンヌはその震源地となった。その結果、パリ大学は、それぞれ専門分野を相対的に限定された13の個別の大学へと分割再編された。

現在の状況

パリ市内は、現在も大学の中心地であり続けている。パリ第1からパリ第7までの各大学は再編されて左岸の3つの区(5区、6区、13区)に存在している。カルチエ・ラタンには、パリ・ソルボンヌ(パリ第4)大学、高等師範学校、コレージュ・ド・フランスといった歴史的施設が残り、重要な地位を今も保ち続けている。

また、ほかの高等教育機関もこの地区に存在する。パリ政治学院、パリ第1大学、パリ第2大学、ジュシュー・キャンパス(Campus de Jussieu:パリ第6大学とパリ地球物理研究所による複合研究施設)、パリ第3大学、社会科学高等研究院、古文書学校、美術学校、パリ市立工業物理化学高等専門大学(EPCI)、応用美術研究所(LISAA)、パリ国立高等鉱業学校(ENSMP)、パリ高等化学学校(Chimie ParisTech)、生活工業・環境科学研究所(AgroParisTech)、パリ高等電子工学研究所(ISEP)、パリ企業経営学院(IAE de Paris)などである。なお、パリ第9大学、エコール・ポリテクニーク、エセック経済商科大学院大学などは、いずれも郊外に移転している。大学街は東部に広がり、かつて5区にあったパリ第7大学は、フランス国立図書館が移転した13区において、複数の大学施設を一般公開している。国立高等工芸学校が1912年からイタリア広場近くに迎え入れられている。

1960年代以降、バンリューに大学が作られ始めたが、その先鞭となったのは1964年にナンテールに作られたパリ第10大学である。同時期には複数のグランゼコールが、特に広大な敷地を求めて、同様にパリの中心部を去っている。パリの南にあるサクレイ台地は重要な研究拠点となっている。その広大な大地には、パリ第9大学やグランゼコール(HEC経営大学院は1964年、高等電子学校は1975年、エコール・ポリテクニークは1976年にそれぞれ移転してきた)のほか、サクレイ研究所などの公的研究所や民間の研究施設が多数存する。

パリ市は、7つの高等専門学校を有している。4つは応用芸術に関するもので、エコール・ブール(家具修理)、エコール・エティエンヌ(グラフィック アート (<http://www.yakimonos.com/ja>)).特に装丁)が有名である。2つは科学技術に関するもので、パリ市立技術学校、パリ市立工業物理化学高等専門大学である。エコール・デュ・ブルーユは園芸に関するものである。

医療・衛生

数多くの病院がパリに設置されている。そのうちいくつかは特に古く、医療の伝統は中世にまでさかのぼる。651年にパリ司教だった聖ランドリーによって設立されたシテ島のオテル・デューは、パリでもっとも古い医療施設である。慈愛ともてなしの象徴であり、12世紀まではパリで唯一の病院であった。



ソルボンヌ広場とソルボンヌのチャペル



パンテオン広場にあるパリ第1大学と第2大学



サン・ジャック通りのパリ第3大学校舎



パリ第7大学

大部分の医療施設は、1849年1月10日法によって創設された公的医療施設である**AP-HP**(Assistance publique - Hôpitaux de Paris、公的支援-パリ病院連合)に名を連ね、パリ市の後方支援をしている。地域圏およびパリの医療センターの役割も果たし、多くの医師や公務員を含む9万人以上が業務に従事している。5区にあるミラミオン館は、かつて病院の施設として使用されていたが、現在は**AP-HP**の博物館となっており、パリの医療の歴史を想起させている。**AP-HP**のパリ市内主要病院としては、ネッケル小児病院、コシヤン病院、サルペトリエール病院、サン・タントワヌ病院、サン・ルイ病院、ビシャ＝クロード・ベルナル病院、ジョルジュ・ポンビドゥー欧州病院を挙げることができる。

他方、アンヴァリッド・軍病院は**AP-HP**に属していないが、保健大臣の監督のもと国防大臣に権限が委任されており、退役軍人などの治療を行っている。同様に、国立アンヴァリッド研究所^[45]では、現役および退役軍人（その家族などの被保険者を含む）などが医療看護や外科の治療を受けられる。

パリの近郊「小さな王冠」では、パリ東・クレティユ・ヴァル＝ド＝マルヌ大学(パリ第12大学)附属アンリ・モンドール大学病院センター(クレティユ)、パリ南大学附属クレムラン・ビセートル大学病院センター(ル・クレムラン＝ビセートル)、ル・ランシー＝モンフェルメイユ・コミュニケーション連携医療センター、ボジョン病院(クリシー)が有名な医療機関である^[46]。「大きな王冠」においても、**AP-HP**に属してはいないが、いくつかのコミュニケーション連携の総合病院が存在する。たとえば、アルジヤントウイユのビクトル・デュプイ病院やヴェルサイユ医療センターを挙げることができる。

また、医療研究機関としては、1260年にルイ9世によってパリの視覚障害者救済を目的として設立されたキャンズ・ヴァン病院、いずれも軍の衛生部に属するヴァル＝ド＝グラース軍研究病院、ベルシー軍研究病院、ベガン軍研究病院を挙げることができる。

さらに、ヌイイ＝シュル＝セヌには、1906年に設立された社会保障非受益者のための非営利・認可私立病院であるパリ・アメリカン・ホスピタルも特筆される。

パリは、フランス全土でも医師の密度がもっとも高い街のひとつである。たとえば、2005年現在、パリの一般医は5,840人を下らないが、セヌ＝サン＝ドニ県とヴァル＝ドワーズ県には両県を合わせても3,349人の一般医しかいない^[47]。

パリでは、公衆衛生を保証・保持するため、特に貧困層向けに、16の市立入浴施設が9つの区に分散設置されている。これらの入浴施設は個室を有するが、洗面具は利用者が用意することになっている^[48]。

交通

詳細は「パリの交通」を参照

空港

パリ＝シャルル・ド・ゴール空港

パリ北部郊外のロワシーに位置し、TGVや在来線の駅とも直結している。エールフランス航空の本拠地かつハブ空港であり、エールフランス航空が成田空港に1日に2便、関西空港に1日に1便の直行便を、日本航空が成田空港に1日に1便、羽田空港に1日に1便(2010年10月開設)の直行便を運航している。また、全日空が羽田空港からの直行便を、アエロフロート・ロシア航空が成田空港からのモスクワ経由便を運航している。

オルリー空港

パリ南部オルリー市にある空港。かつてはもっとも主要な空港だったが、シャルル・ド・ゴール空港にその座を譲った。とはいえ現在も国際空港として機能しており、おもにヨーロッパ近隣諸国のほか、旧植民地のアフリカ・中近東方面の便が発着している。Orly-sud(南)とOrly-ouest(西)の2つの発着ターミナルがある。現在は政府専用機、自家用および商用機の発着に使われている。

ボーヴェ空港

パリより北に約80キロのボーヴェ市近くにある空港。ライアンエアーなどが使用している。

ル・ブルジェ空港

1919年開業。オルリー空港開港までの主要空港だった。アメリカ人のチャールズ・リンドバークが世界初の大西洋無着陸横断飛行を行ったときに着陸したのがこの空港である。偶数年の7月に英国のファーンボロー空港で、奇数年はここで航空ショーが開催される。宇宙航空博物館がある。

ヘリポート

15区南部のセヌ川沿い、ペリフェリック(環状道路)の外側に位置する。ヘリポートはパリ市内の敷地である。パリ市内上空は飛行禁止区域のため、ヘリコプターはパリ市の境界すれすれを飛ぶことが多い。

鉄道

主要ターミナル駅

リヨン駅(12)

リヨン、マルセイユ、スイス、イタリア方面

ベルシー駅(12)

リヨン駅の近くにある駅。当駅から出た線路はリヨン駅からのものと合流するため方面は同じだが、イタリア方面への国際夜行列車およびカートレイン乗



セヌ右岸からみたオテル・デュー・ド・パリ



パリ＝シャルル・ド・ゴール空港



オルリー空港

用車運搬用列車が発着。

北駅(10)

ロンドン行ユーロスター、ブリュッセル・ケルン・アムステルダム行タリス、TGVほか

東駅(10)

ストラスブール、ドイツ方面。TGVやICEほか。

モンパルナス駅(14、15)

ブルターニュ地方、ボルドー方面TGVほか。

サン・ラザール駅(8)

西部、ノルマンディー方面

オステルリッツ駅(13)

オルレアン・トゥール方面 (TGV以外)のほか、フランス南部・スペインへ向う夜行列車のほとんどが発着。

市内にはメトロ(地下鉄)とRER(高速地下鉄)がくまなく走っている。メトロは14号線まであり、運営はRATP(パリ市営交通)が行っている。2006年にパリ市最南端でトラム(路面電車)が開通した。このほか郊外を結ぶトラムがある。

道路

パリ市内では道路混雑を避けるため自動車交通の抑制が目指されており、バス・自転車専用レーンが多く設置され、一方通行路も多くルートが複雑であるため、不慣れであると運転が難しい。また主要交差点の多くは、ラウンドアバウト(ロータリー)方式となっている。地元民の多くは、狭い市内で駐車場所を確保するために前後間隔を密着させて道路脇に縦列駐車を行っており、路上駐車が非常に多い。

パリ市域の外縁を環状高速道路ペリフェリックが取り巻いており、その内側の市域には立体交差式の自動車専用道はあるものの、高速道路は存在しない。



フランスの道路の原点を象徴する『ポワン・ゼロ』

おもな一般道

シャンゼリゼ通り

凱旋門のあるエトワール広場とパリ中心部のコンコルド広場を結ぶ、パリでもっとも有名な目抜き通り。フランス一周自転車ロードレース「ツール・ド・フランス」はここが目的地となる。7月14日の革命記念日にはミリタリーパレードが行われる。

フォブール・サントノレ通り

有名ファッションブランドの洋服店などが並ぶ、パリ8区内をシャンゼリゼ通りと並行して走る通り。ロワイヤル通りを挟んでパリ1区内を走るサントノーレ通りと結ばれていく。

リヴオリ通り

ルーヴル宮北側に沿って市内最中心部を横断する道路。

サントアントワヌ通り

リヴオリ通りとバスティーユを結ぶ、パリ中心部を横断する道路のひとつ。

フォブール・サントアントワヌ通り

バスティーユとナシオン広場を結ぶ通り。

クール・ド・ヴァンセンヌ通り

ナシオンからパリ最東端ヴァンセンヌ門までを結ぶ目抜き通り。目抜きと言ってもシャンゼリゼ通りのようには栄えておらず市の外れではあるが、決して寂れてはおらずパリの東の玄関の品格を保った通りである。週2回、パリ最大規模の朝市が開かれる。

オペラ通り

ガルニエ宮(オペラ座)から、コメディ・フランセーズやルーヴル宮に向かって伸びる通り。高級洋服店やホテルなどが立ち並ぶが、付近は日本人街でもある。

グラン・プールヴァール

1860年のオスマン公によるパリ大改造で生まれたプールバールのうち、メトロ8番と9番が走る9区 - 10区の南部沿いの通り、および3区 - 4区の東部沿



時計台のついたリヨン駅



北駅構内



北駅



メトロ



いの通りを指す。

サンジェルマン大通り

サンジェルマン・デ・プレからカルチエ・ラタンを通る、左岸の代表的な通り。

ムフタール通り

パリ5区にある道路であり、多くのレストランや市場などが立ち並んでいる。

主な車輛専用道

ヴォワ・エスプレス

河岸沿いの一部は、パリを横断する一方通行専用の高速バイパス道路となっている。なお、日曜日の昼間時には歩行者・自転車用に開放され、自動車の通行ができなくなる。

ブルヴァール・デ・マレシヨー

パリ市内最外周部を囲んで走る道路のうち、一般道をまとめてこう呼ぶ。ティエールの城壁の後に作られたブルヴァール。ペリフェリックより少し内側に位置する。

ペリフェリック

パリ市内最外周部を囲んでいる環状高速道路で、現在はこれがパリ市の境界となっている（ブローニュの森、ヴァンセンヌの森など一部の区間を除く。これらの区間は地下化されている）。

スポーツ施設

- ベルシー・アリーナ
- ローラン・ギャロス(テニスコート)
- スタッド・ド・フランス(サッカー、陸上競技、ラグビーなどの競技場)
- パリ・サンジェルマン(サッカークラブ)
- スタッド・フランセ(ラグビークラブ)
- パリロンシャン競馬場
- オートウイユ競馬場
- ヴァンセンヌ競馬場

日本人とパリ

詳細は「パリの日本人コミュニティ」を参照

パリ症候群

詳細は「パリ症候群」を参照

姉妹都市・提携都市

「ローマのみがパリにふさわしく、パリのみがローマにふさわしい」^[49]^[50]^[51]

- ローマ、イタリア、1956年
- 京都市、日本、1958年
- 東京都、日本、1982年
- カイロ、エジプト、1985年
- ベルリン、ドイツ、1987年
- ソウル、大韓民国、1991年
- モスクワ、ロシア、1992年
- ベイルート、レバノン、1992年
- シカゴ、アメリカ合衆国、1996年
- サンフランシスコ、アメリカ合衆国、1996年
- サンティアゴ・デ・チレ、チリ、1997年
- 北京、中華人民共和国、1997年
- サンクトペテルブルク、ロシア、1997年



シャンゼリゼ通り



フォブール・サントノレ通り



サンジェルマン通り

-  プラハ、チェコ、1997年
-  リスボン、ポルトガル、1998年
-  リマ、ペルー、1999年
-  ブエノスアイレス、アルゼンチン、1999年
-  マドリード、スペイン、2000年
-  ワシントンD.C.、アメリカ合衆国、2000年
-  ロンドン、イギリス、2001年
-  ポルト・アレグレ、ブラジル、2001年
-  ジュネーヴ、スイス、2002年
-  ケベック・シティー、カナダ、2003年
-  アルジェ、アルジェリア、2003年
-  サンパウロ、ブラジル、2004年
-  ラバト、モロッコ、2004年
-  カサブランカ、モロッコ、2004年
-  チュニス、チュニジア、2004年
-  コペンハーゲン、デンマーク、2005年
-  モントリオール、カナダ、2006年
-  ニューヨーク、アメリカ合衆国、2007年

世界にあるパリ

ヨーロッパ的な街並みに対し、「○○のパリ」と異名がつけられている。特に移民や植民地などでフランス色が強い都市に多い。

- モントリオール - 「北米のパリ」(フランス系移民が多い)
- ケベック・シティー - 「北米のパリ」(フランス系移民が多い)
- ブエノスアイレス - 「南米のパリ」
- ホーチミン - 「東洋のパリ」(元フランスの植民地)
- プノンベン - 「東洋のパリ」(元フランスの植民地)
- 上海 - 「東洋のパリ」(フランス租界があった)
- ハルビン - 「東洋のパリ」(ヨーロッパ風の建物が数多く現存)
- イルクーツク - 「シベリアのパリ」
- ベイルート - 「中東のパリ」(元フランス委任統治領)
- ブカレスト - かつて「東欧の小パリ」と呼ばれた
- トロムソ - 「北欧のパリ」
- コペンハーゲン - 「北欧のパリ」
- トリノ - 「イタリアの小パリ」

脚注

注

- ↑ マスターカードが2014年に公表した統計によると、パリは世界で3番目に外国人旅行者が多く訪れる都市、と報告されている。MasterCard Global Destination Cities Index 2014 (http://newsroom.mastercard.com/wp-content/uploads/2014/07/Mastercard_GDCI_2014_Letter_Final_70814.pdf)
- ↑ 概ね名古屋市と同規模である。

出典

- ↑ フランス語: [paʁi] (🔊 音声ファイル)
- ↑ 「パリのみち」:パリ市街地調査余談 (http://dem.kankyo-u.ac.jp/essais/173.html)(東樋口護 鳥取環境大学教授・副学長)
- ↑ Montmartre (http://www.paris-walking-tours.com/montmartre.html)

3. [monuminaire \(http://www.paris-walking-tours.com/monuminaire.html\)](http://www.paris-walking-tours.com/monuminaire.html)
4. [^] JLL、世界の都市比較インデックスを分析「都市パフォーマンスの解説」を公表 (<http://www.joneslanglasalle.co.jp/japan/ja-jp/Documents/New%20Release/20171023-JLL-DecodingCityPerformance.pdf>) JLL 2017年10月25日閲覧。
5. [^] 2015年暮れのパリ同時多発テロ事件等が相次いだ影響を考慮した、東京を拠点とする森ビル傘下民間シンクタンクないし研究所による発表である。世界の都市総合力ランキング(GPCI) 2017 (<http://www.mori-m-foundation.or.jp/ius/gpci/>) 森記念財団都市戦略研究所。2017年10月26日閲覧。
6. [^] Xinhua-Dow Jones International Financial Centers Development Index(2014) (<http://www.sh.xinhuanet.com/shstatics/zhuanti2014/sbg/en.pdf>) 2014年11月7日閲覧。
7. [^] Demographia: World Urban Areas & Population Projections (<http://www.demographia.com/db-worldua.pdf>)
8. [^] *a b* “« Fluctuat nec mergitur » : la devise de Paris devient un slogan de résistance” (https://www.lemonde.fr/attaques-a-paris/article/2015/11/15/fluctuat-nec-mergitur-la-devise-de-paris-devient-un-slogan-de-resistance_4810301_4809495.html) (フランス語). *Le Monde.fr*. (2015年11月15日) 2018年12月8日閲覧。
9. [^] “パリは「たゆたえども沈まず」(Fluctuat nec mergitur): 大野ゆり子 | 記事 | 新潮社 Foresight(フォーサイト) | 会員制国際情報サイト (<https://www.fsight.jp/articles/-/40677>)”. *新潮社 Foresight(フォーサイト)*. 2018年12月8日閲覧。
10. [^] Arch. du Crédit Lyonnais: Note de Mazerat à Letourneur, 8 août 1871, cit. Jean Bouvier, *Le Crédit Lyonnais de 1863 à 1882: les années de formation d'une banque de dépôts*, Paris, 1961, 2vols, t. 1, p. 408, note 1.
11. [^] アルフォンス、ギユスターヴ、エドモンとそれぞれの子息
12. [^] Marie-Jeanne Dumont, *Le logement social à Paris 1850-1930: Les Habitations à Bon Marché*, Liege, 1991, pp.32-34.
13. [^] 実際の建設ではロスチャイルド財団とルボディ財団の意匠が利用された。
14. [^] Paris Politiques> Statut et institutions de Paris> L'évolution du statut de Paris> Les récentes évolutions législatives (http://www.paris.fr/portail/politiques/Portal.lut?page_id=4825&document_type_id=5&document_id=3048&portlet_id=10317)
15. [^] Une histoire croisée de Paris et de ses banlieues (http://www.paris.fr/portail/accueil/Portal.lut?page_id=6135&document_type_id=4&document_id=13953&portlet_id=14061&multileveldocument_sheet_id=1510).
16. [^] 「パリ市長の歴史をたどる」(<http://megalodon.jp/2014-0430-2326-41/www.newsdigest.fr/newsfr/features/6328-mayors-of-paris.html>)
17. [^] Budget 2011 de la ville et département de Paris (http://labs.paris.fr/commun/budget_primitif_2011/pdf/chiffres_cles.pdf)
18. [^] Le budget primitif 2008 : état de la dette (http://www.paris.fr/portail/pratique/Portal.lut?page_id=7708&document_type_id=4&document_id=49199&portlet_id=17822&multileveldocument_sheet_id=8692)
19. [^] [1] (<http://www.tgi-paris.justice.fr/>) Le tribunal de grande instance de Paris(consulté 2013-04-07)
20. [^] [2] (<http://www.ca-paris.justice.fr/>) La cour d'appel de Paris(consulté 2013-04-07)
21. [^] [3] (<http://www.ca-versailles.justice.fr/>) La cour d'appel de Versailles(consulté 2013-04-07)
22. [^] La documentation Française - Criminalité et délinquance constatées en France - Tome I (Année 2006) (<http://www.ladocumentationfrancaise.fr/rapports-publics/074000386/somm.shtml>)
23. [^] La documentation Française - Criminalité et délinquance constatées en France - Tome II (Année 2006) (<http://www.ladocumentationfrancaise.fr/rapports-publics/074000387/somm.shtml>)
24. [^] <http://www.lefigaro.fr/assets/pdf/violences-sexuelles-2008.pdf>
25. [^] <http://www.lefigaro.fr/assets/pdf/violences-physiques-crapuleuses2008.pdf>
26. [^] <http://www.lefigaro.fr/assets/pdf/violences-physiques-non-crapuleuses2008.pdf>
27. [^] <http://www.lefigaro.fr/assets/pdf/menaces-violence-2008.pdf>
28. [^] <http://www.lefigaro.fr/actualite-france/2009/04/16/01016-20090416ARTFIG00601-la-nouvelle-carte-de-france-de-l-insecurite-.php>
29. [^] Le plan vigipirate expliqué sur le site du Ministère de l'intérieur (http://www.archives.premier-ministre.gouv.fr/raffarin_version2/information/fiches_52/plan_vigipirate_50932.html)
30. [^] Document expliquant le plan vigipirate en Île-de-France (http://www.prefecture-police-paris.interieur.gouv.fr/documentation/dossiers/vigipirate_2005.pdf)
31. [^] “Climatological Information for Paris, France (http://www.meteofrance.com/climat/france/paris/75114001/normales))”. Meteo France (2011年8月). 2019年1月1日閲覧。
32. [^] “Paris–Montsouris (984) (https://web.archive.org/web/20180227003336/https://donneespubliques.meteofrance.fr/FichesClim/FICHECLIM_75114001.pdf)” (French). *Fiche Climatologique: Statistiques 1981–2010 et records*. Meteo France. 2018年2月27日時点のオリジナル (https://donneespubliques.meteofrance.fr/FichesClim/FICHECLIM_75114001.pdf)よりアーカイブ。2019年1月1日閲覧。
33. [^] “Normes et records 1961–1990: Paris-Montsouris (75) – altitude 75m (<https://web.archive.org/web/20170824091330/http://www.info>

- climat.fr/climatologie-07156-paris-montsouris.html)” (French). Infoclimat. 2017年8月24日時点のオリジナル (<http://www.infoclimat.fr/climatologie-07156-paris-montsouris.html>)よりアーカイブ。2019年1月1日閲覧。
34. ^ “Paris, France – Climate data (<http://www.weather-atlas.com/en/france/paris-climate>)”. Weather Atlas. 2019年1月1日閲覧。
35. ^ *Bulletin de l'Alliance des arts*, 2^e année, n^o 4, Paris, 10 août 1843, p. 6, et *Journal des artistes*, 17e, n^o 8, 20 août 1843.
36. ^ Yvan Christ, *Paris des Utopies*, Paris, Éditions Balland, 1977, p. 201。
なお、再建される前の最初の凱旋門は1716年に取り壊された。再建凱旋門も、第三共和政時代に「共和国の凱旋像」に置き換えられた。
37. ^ Cities Rank Among the Top 100 Economic Powers in the World (<https://www.thechicagocouncil.org/issue/global-cities>) Chicago Council on Global Affairs 2016年10月28日閲覧。
38. ^ フォーチュン・グローバル500 2011年版 (<http://money.cnn.com/magazines/fortune/global500/2011/index.html>) (英語)
39. ^ *a b c d* 角田奈歩『パリの服飾品小売とモード商—1760-1830』
40. ^ APUR - observatoire des familles à Paris : Les familles parisiennes (<http://www.paris.fr/portail/viewmultimediadocument?multimedia-document-id=22854>) パリ市・パリ市の世帯の状況(フランス語)
41. ^ INSEE - À Paris, les ménages les plus aisés voisins des plus modestes (http://www.insee.fr/fr/themes/document.asp?ref_id=8229) 国立統計経済研究所・パリにおける所得分布の高低(フランス語)
42. ^ INSEE - Flux d'immigration permanente par motif en 2003. (http://www.recensement.insee.fr/RP99/rp99/wr_page.affiche?p_id_nivgeo=M&p_id_loca=001&p_id_princ=MIG3&p_theme=ALL&p_typeprod=ALL&p_langue=FR) 国立統計経済研究所・出生地に基づくパリの移民統計(フランス語)
43. ^ INSEE - Aire urbaine 99 : Paris - Migrations (caractère socio-économique selon le lieu de naissance). (http://www.insee.fr/fr/theme/s/tableau.asp?reg_id=0&id=498) 国立統計経済研究所・2003年における移民の動向(フランス語)
44. ^ Histoire de l'immigration en France. (<http://www.histoire-immigration.fr/index.php?lg=fr&nav=14&flash=0>) フランスの移民の歴史(フランス語)
45. ^ Site de l'Institution nationale des Invalides (<http://www.invalides.fr/>), sur *invalides.fr*. Consulté le 16 mai 2013.
46. ^ Carte des hôpitaux (<http://www.aphp.fr/carte/>), sur *aphp.fr*. Consulté le 17 mai 2013.
47. ^ Ordre national des médecins - Démographie médicale (<http://www.conseil-national.medecin.fr/index.php?url=demographie/index.php&open=2#2>)
48. ^ Bains-douches municipaux de la ville de Paris (http://www.paris.fr/pratique/personnes-en-grande-precarite/vivre-au-quotidien/bains-douches-municipaux/rub_5365_stand_8972_port_11521), article du 16 septembre 2013, sur *paris.fr*, consulté le 16 septembre 2013.
49. ^ “Twinning with Rome (http://www.paris.fr/portail/english/Portal.lut?page_id=8139&document_type_id=5&document_id=29903&portlet_id=18784)”. 2010年5月27日閲覧。
50. ^ “Les pactes d'amitié et de coopération (http://www.paris.fr/portail/accueil/Portal.lut?page_id=6587&document_type_id=5&document_id=16468&portlet_id=14974)”. *Mairie de Paris*. 2007年10月14日閲覧。
51. ^ “International relations: Special partners (https://web.archive.org/web/20070806151309/http://www.v1.paris.fr/EN/city_government/international/special_partners.asp)”. *Mairie de Paris*. 2007年8月6日時点のオリジナル (<http://www.paris.fr/>)よりアーカイブ。2013年8月28日閲覧。

関連項目

上述までの既出のリンクを除く。

スポーツ

- 全仏オープン テニス
- パリ＝ダカール・ラリー
- 1900年パリ オリンピック
- 1924年パリ オリンピック
- 2024年パリ オリンピック
- 2003年世界陸上競技選手権大会

施設

- パリの宗教施設の一覧
- ディズニーランド・パリ

美術・音楽教育機関

- エコール・デ・ボザール
- パリ国立高等音楽・舞踊学校
- エコールノルマル音楽院
- スコラ・カントルム

テレビ局

- フランス・テレビジョン
- TF1
- カナルプリュス

ラジオ局

- Radio FG
- NRJ
- France Inter

催事

- パリ祭
- 白夜祭
- ユーロビジョン・ソング・コンテスト1978
- パリ万国博覧会

出来事

- フランスのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路
- グランドツアー
- パリ症候群
- パリ人肉事件

化学

- ルテチウム
- フランシウム
- ユウロビウム
- キュリー

舞台とした作品

- カテゴリ:パリを舞台とした作品
- パリの空の下
- オー・シャンゼリゼ
- 巴里祭
- パリのお嬢さん

外部リンク

公式

- パリ市公式サイト (<https://www.paris.fr/>)（フランス語）（英語）

日本政府

- 在フランス日本国大使館 (https://www.fr.emb-japan.go.jp/itprtop_ja/index.html)（日本語）

観光

- パリ観光局 (<https://ja.parisinfo.com/>)（日本語）
- フランス観光開発機構 - パリ (<https://jp.france.fr/ja/>)（日本語）

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=パリ&oldid=75306360>」から取得

最終更新 2019年12月10日 (火) 07:56（日時は個人設定で未設定ならばUTC）。

テキストは[クリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンス](#)の下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は[利用規約](#)を参照してください。